

クラスの進度に沿った自主作成漢字教材の漢字提出の方法
—パリ第7大学の *KANJI DU MANUEL* について—
**ARRANGEMENT OF KANJI IN ORIGINAL WORKBOOK IN ACCORDANCE
WITH THE COURSE SCHEDULE**
—A CASE STUDY ON *KANJI DU MANUEL* OF UNIVERSITY PARIS 7—

川口さち子
Sachiko Kawaguchi
聖学院大学
Seigakuin University

1. はじめに

筆者は、川口（2010b）でヨーロッパの大学で行われている漢字教育の実際を調べるために、2009年4月から6月にかけてフランスの高等教育機関を中心にアンケートとフォロー・アップ・インタビューにより調査を行った。

調査の結果、日本語を主専攻に置く大学では、漢字の習得目標が非常に高く、大学の3年生までに1000字程度～1500字程度習得を目標とするという機関が多かった。

それでは、それらの大学では、漢字教材はどのようなものを使っているのだろうか。調査中に収集した教育機関の自主漢字教材のうち、「パリ・ディドロパリ第7大学（以下パリ第7大学と称す）」の *KANJI DU MANUEL DE PREMIERE ANNEE*（『第一学年の教科書の漢字』以下、『KM1』と略称）および *KANJI DU MANUEL DE DEUXIEME ANNEE*（『第二学年の教科書の漢字』以下、『KM2』と略称）を取り上げ、これらの教材の構成がどのようになっているか、文法・語彙を学ぶ主教材とはどのような関係にあるかなどについて検討する。パリ第7大学では、初級教科書として、『みんなの日本語』を使用している。この教科書に準拠した市販の漢字教科書は、『漢字』および『漢字練習帳』の2種類があるが、これらは、学習漢字が500字あまりしかない。一方、パリ第7大学の自主作成漢字教材では、926字の漢字を導入している。川口（2010a）では、この2種類の市販の教科書と比較しながら、上記の自主作成漢字教材の一部分を取り上げて、主教材の『みんなの日本語』の進度に合わせてどのように工夫されてこれらの漢字が配列されているか、また漢字教材はどうあるべきかということ考察したが、本稿ではさらに範囲を広げてこの教材が、どこまで主教材の進度に準拠して漢字を提出することに成功しているのかも含めて述べる。

2. パリ第7大学の日本語講座

パリ第7学では、人文学部東アジア言語文化学科に日本語科があり、1年目開始時で約150名ほどの学生が日本学の専門研究上の必要性から日本語を勉強している。授業時間は、第1・2・3学年でそれぞれ週9時間の24週間、計216時間である。（日本の第4学年にあたる年は、修士課程になる。）このうち、漢字に当てられる時間は、1年目で週4.5時間の「筆記」（作文・文法・漢字）のうちの1.5時間であり、2年目には、漢字の時間はなく、自学習となる。ところが、

パリ第7大学では、第3学年終了時までには日本語能力試験(以下、「JLPT」と略称)2級合格を目標としているので、これをクリアしようとする学生は、漢字約1,000字を読み・書きとも習得しなくてはならない。この大学の日本語主教材は『みんなの日本語初級』(以下、『みんな』と略称)であるが、この教材に付属している2種の漢字副教材では、I・II巻合わせてもそれぞれ466字・530字しか学べず、JLPT2級合格の目標には届かない。そこで、この量的な問題を解決するためにどうしても学生の自習用に自主教材の開発が必要となるというわけであるが、実は、『みんな』の付属漢字教材2種にはそれ自体の問題が存在し、そのことが漢字教材の自主作成をさらに強く促したものだと言える。この点が本稿の分析の中心となり、次章以降で詳述する。

前章で紹介したパリ第7大学の自主教材『KM1』は426字、『KM2』は500字の漢字を扱っており、この2冊で926字の漢字を学べるので、市販されている、主教材『みんな』の付属漢字教材よりずっと多くの漢字を学ぶことができるようになっている。もちろん、この教材を使ってもクラス時間の制限などのせいで、実際に教えられる漢字は500字前後であるのが一般的であり、足りない分は学生の自習に任せなくてはならない。と言っても、ただJLPT出題の2級漢字を画数の少ない順に並べてあるような教材では、初級日本語の語彙学習を支えることはできず、いくら漢字を勉強しても教科書で習った語彙の表記に結びつかないようでは学習動機も維持できない。そこで、このような付属漢字教材では、主教材の文法・語彙の学習に合わせて、既習の語彙が表記できるように、また既習語彙や文法項目に関連する補助語彙が表記できるように漢字を配列しておかなければならない。本論では、まず次の3章で、『みんな』の付属漢字教材の構成・内容を紹介し、その問題点を指摘する。それを踏まえ、4章・5章で、『KM1』と『KM2』がそれぞれどのような方法で漢字を提出しているのかを、主教材『みんな』の付属教材との比較で検討する。

3. 『みんなの日本語初級』の付属漢字教材の構成と問題点

主教材『みんな』は、日本内外で広く使われている有名な初級日本語教科書である。本冊はI・IIと2巻本であり、いくつかの付属教材がついているが、付属漢字教材は『みんなの日本語初級I漢字』(以下、『漢字I』)と『みんなの日本語初級II漢字』(以下、『漢字II』)というタイトルで、それぞれ教科書本冊のI・IIの語彙に準拠した漢字教材である。また、この他に、本冊のIに対応する『みんなの日本語初級I漢字練習帳』(以下、『練習I』)と本冊のIIに対応する『みんなの日本語初級II漢字練習帳』(以下、『練習II』)と略称)が販売されている。

では、まず『漢字I・II』について解説する。『漢字I』と本冊の関係を見ると、本冊第1課の語彙に該当する漢字が『漢字I』の第1課なのではなく、漢字が「ユニット」に分けて分類されており、一つのユニットには10~14字の漢字が収められている。ユニット内の漢字を総計すると、『漢字I』で220字、『漢字II』で246字、総計466字の漢字が学べる。ユニットは数個まとまって本冊の

数課分の語彙に該当するように組み立てられており、その関係をそれぞれの巻で示すと表1のようになっている。

『漢字Ⅰ』のように、本冊と漢字教材を課ごとに対応させるのではなく、いくつかの課でまとめて提出することは、語彙と漢字表記の対応をより広い範囲で体系的に学ばせることに役立つであろう。

次に『練習Ⅰ』と『練習Ⅱ』の構成を検討する。『練習Ⅰ』は第25課、「練習Ⅱ」は第26課以外、すべて2課ごとにまとめて、当該の課に出てくる基本的なことばを書き表す漢字を集めてある。『練習Ⅰ』では、2課分(第25課は1課分)で16字の漢字が配当され、全部で218字が学習できる。一方、『練習Ⅱ』のほうは、2課分(第26課は1課分)で、「ステップ1」9字・「ステップ2」15字と分類された、計24字が配当されている。『練習Ⅱ』の使い方の解説(同書 p.iv)によると、この区別は表2のようである。

このような分類のもと合計で312字が学習できるため、『練習Ⅱ』の漢字との総計で530字(JLPT3・4級配当漢字300字、2級配当漢字230字)を学べることになるのである。「表3」の左から4番目の欄は、この『練習Ⅰ』『練習Ⅱ』の配当漢字を示している。『練習Ⅱ』の場合は、26課以降、所属漢字をステップ別に挙げてある。

「表3」の右端の欄は、パリ第7大学の自主漢字教材の課ごとの配当漢字であるが、これについては次の章で検討する。

本冊と『漢字』・『練習』に挙げられている漢字を比較してみると、かなり各課の所属漢字に異なりが出ていることが分かった。[詳しくは、川口(2010b)参照。]

その理由は、『漢字Ⅰ』と『練習Ⅰ』の作成者の漢字学習に対する取り組み方の違いかと思われる。『漢字Ⅰ』『漢字Ⅱ』の監修者である西口光一氏は、中・上級者の漢字学習書として広く知られている『Kanji in Context 中・上級者のための漢字と語彙 Reference Book』(西口・河野 1994)の著者である。本書の「この教材の内容と使い方」の中で筆者は次のように述べている。

中・上級の学習者にとっては、新しい漢字の習得もさることながら、漢言語彙を増やし、その正しい用法を身につけることも非常に重要です。しかし、従来の漢字教材はもっぱら漢字が個々の学習の中心で、語彙についてはいくつか示すだけであったり、学習者にはあまり重要でない語が提示されたりしていました。(西口・河野 1994 : p.7)

このような現状認識のある西口らは、上掲の教材で提示した漢字が語彙となって使われる様子を確認・練習できる『ワークブック』を姉妹教材として出版し、両教材の使用を勧めている。まさに書名の示すように「in context」すなわち「文脈の中で」漢字の用法が分かるように、提示する漢字を選択しているということである。この姿勢は、『漢字』の監修の際も生かされたとみられる。

たとえば、5課まで比較して本冊と重なっているものをみると、「員・医・者・社・中」が、『漢字Ⅰ』では、ユニット3で扱われており、それは、本冊第1課の学習項目に「人物紹介」があり、そのために職業名・民族名などを表現するという文脈がはっきりしているため、「医者」「会社員」「中国人」など、

本冊に登場する名詞を表記する漢字を含めたものと思われる。ユニット4の「朝・昼・晩」は、本冊第4課の時間表現の文脈で自然に使えるし、ユニット5で「去」を入れているのは、「今年」「来年」と並んで、「去年」が書けるからにちがいない。そこだけ、「きょ年」と表記する不自然さを避けるということにもなり、時間関連語彙のまとまりが示せる。同様に、「電・動・転」は、移動手段の語彙の多い第5課で、「自」「車」と合わせて、「電車」「自動車」「自転車」が表記可能になるように導入している。

一方、『練習帳Ⅰ』のほうは、「社」をのぞいてこれらの漢字がなく、造語力がある漢字が提出されていない。これは、『会社員』は、この段階では「会社いん」でよく、「医者」も「いしゃ」でよいという考えで、それよりも4級漢字の「名・大」で「名まえ」「大学」が、3級漢字の「方」で「あの方」が、それぞれ書けるということを優先した結果の選択である。早い段階でJLPT4級漢字と画数の少ない3級漢字を集めようとしている傾向が明らかである。

このように『漢字Ⅰ』と『練習Ⅰ』は、後者が前者の読み・書き練習のためのワークブックになっているのではなく、独立した教材であると考えてよいであろう。ここに、『みんな』を主教材に選んだ海外の日本語教育機関が主教材準拠の漢字教材の選択に迷う背景があるわけである。

4. 自主教材における漢字提出の方法

前章で述べたように、『漢字Ⅰ』と『練習Ⅰ』の間には一つの主教材に付属する漢字教材として内的に有機的な関連が認められず、それぞれが独立した教材と考えるとよい。そこで、『みんな』を主教材として使用する機関は、漢字学習のための付属教材として『漢字Ⅰ』と『練習Ⅰ』の両方を使うか、一方だけを使うか、どちらも使わないかという選択をしなければならない。最後の選択をした場合には、さらに別の市販の漢字教材を使うか、自主教材を作成するかを考えなければならない。パリ第7大学は、このうち後者の道を選んだわけである。パリ第7大学の漢字教材は、「1. はじめに」で紹介した『KM1』と『KM2』であるが、この章では『KM1』の内容から、その漢字提出に関する考え方を分析し、論評を加える。

『KM1』は、『みんな』に準拠して、課ごとに配当した漢字の筆順・読み・意味を並べた表と「読む練習」「書く練習」のワークブックが一体になった教材であるが、自主教材であるため市販されてはいない。漢字の配当は、『KM1』では1課に12字～18字、『KM2』では毎課20字で、それぞれ426字と500字、総計926字を導入できる。これは、前述のとおり、『漢字Ⅰ・Ⅱ』の466字、『練習Ⅰ・Ⅱ』の530よりはるかに多い。課ごとの漢字配当のしかたを見るために前章で提示した「表」をもう一度見てみよう。表のもっとも右の欄が『KM1・2』の漢字の欄である。

最初の5課分をよく見ると、『漢字Ⅰ』にも『練習Ⅰ』にも出ていない漢字が見受けられ、そこに『KM1』の作成者の意図が見えてくる。それらの漢字を課別に挙げると、以下のとおりである。

◇第2課：私・語

◇第3課：話・室

◇第5課：曜・家・歩

第2課に「私」と「語」が入っているのは、象徴的である。まず、「私」は第1課で、すでにことばとして「わたしは～です」の文型に登場しており、さらに第2課では「～はわたしの～です」の文型で再び登場する。一人称代名詞として、このあと何回となく出てくる「わたし」の漢字表記をここで教えておくことは、文脈上も無理はないものと思われる。「語」は、形は少し複雑に見えるが、JLPT4級の漢字であり、これをここで導入することは、すでに導入済みの「日」「本」、および同じ課で導入される「中」「国」「人」とあわせることで、「英語」「韓国語」「韓国人」以外のすべての言語名と民族名を漢字とカタカナで表記できることになり、英語やフランス語と比べた場合に漢字の生産性がいかに高いかを示すことができるという点で高い教育的効果が望める。川口他(1995)は、自身のアメリカの大学におけるコミュニケーション型漢字指導の成果を分析する中で、同じく「語」と「人」の語彙生産性の高さに言及しており、このような考え方をすることは、特に非漢字圏地域の外国語としての日本語教育における漢字教育には必要な観点である。筆者が、本段落冒頭で「象徴的」と言ったのは、『KM1』の編纂者にこのような教育的姿勢が見えるためである。

続く第3課の「話」は「電」と組み合わせて「電話」として表記することで、同じ課の「気」による「電気」と並べて「電」から作られることばの例を示しているのも、前述の漢字の生産性の例示である。また、「室」が「かいぎ室」「きょう室」「ちか室」のように書けることを示すのも同様の発想である。「ちかしつ」などは、表記例として、同じ課の「下」も利用して、「ち下室」という表記で示しており、既習の漢字で表記できるところはどんどん仮名と置き換えていくことで通常の日本語表記に近づいていくことを示している。しかも、「電話」も「かいぎ室／きょう室／ち下室」も、すべて「～は(場所名詞)です」の文型で存在表現が可能であり、第3課全体の学習文脈に適合する。

第5課では、同じ発想から、移動表現の文型にあわせて「家」と「歩」を配置し、同じ課に配当されている漢字とともに「家に帰ります」「家ぞくと行きます」「駅まで歩きます」「歩いて来ます」などの表記を可能にしている。さらに、形は複雑だがJLPT3級漢字である「曜」を積極的に導入していることは注目値する。『みんな』の付属教材では、この漢字が『漢字I』の「ユニット15」、『練習II』の「29・30課」とかなりうしろのほうに配当されていることを思えば、非常に特別な扱いのように見える。しかし、実は、「曜」は曜日を表すほかに用法がないため、提出を遅くしたところで、その時点で既出の多くの漢字と結びついてさまざまなことばを作り上げるだけの生産性がない。そこで、第3課で既習の「月」から「金」までの漢字と、第1課で学習済みの「日」と組み合わせて、「日曜日」「月曜日」…「土曜日」という表記を早い段階で可能にしている。『漢字I』では第20課前後まで、『練習II』では第29・30課まで、学生には「日よう日」としか書くことを期待していないのに比べれば、あることばをどのあたりから使い始めるかとそれを表記する漢字を課程のどのあたりで入れるかについて、『KM1』はかなりよく考えて、配当する漢字を選択しているものと思わ

れる。ちなみに、本冊の5課で、「がっこう」「えき」は練習問題の絵の中で使用されていることばで、平仮名表記となっている。また「歩く」は、絵を使って練習問題に答えるときに「歩いて」として出てくる語彙で、教科書の中では語彙が表記されていない。『KM1』は、このような語彙も丁寧にひろって、学習漢字に早い課から取り入れている。それは、本冊の30課でも同様である。絵を見て答える問題で、本冊では、答えとしてしか出てこない「池の周りに木が植えてあります」という表現に対応させて、「池」「周」「植」の漢字が学習漢字となっている。本冊では、この三つの漢字はどこにも表記されていないのである。

さらにまた『KM1』の注目すべきところは、漢字の構成についての意識化を意図していると思われるところである。例えば、前述した「室」や「歩」の筆順・読み／意味・部首を示した表の中に、「室」の場合は「土」、「歩」の場合は「少」の漢字が含まれていることを明記し、それぞれその構成要素の漢字の読みと意味を書いてあることである。これは、複雑な字形の漢字でもいくつかの決まった形のパーツの組み合わせからできており、そのパーツのいくつかはそれ自体で独立して漢字でもあるという意識を学生に持たせ、それによって一つの漢字を覚えることが別の漢字を学ぶ時の助けになることを理解させることができる。このことは、学生が漢字の学習がさまざまな形を果てしなく記憶していくのではなく、いくつかの有限の要素の組み合わせであることを知り、また早く登場する簡単な形の漢字ほど他の漢字のパーツになりやすいと気づくことを促進し、入門期の学習動機を維持することに貢献する。『漢字Ⅰ』には筆順や部首の情報はあるものの、このような漢字の構成要素について教育する発想はなく、『練習Ⅰ』もひたすら読みと書きを行わせるのみで、学習者の認知力に働きかける試みは行われていない。

以上のように、パリ第7大学の自主作成教材は、提出時の教科書本冊の学習文脈を利用しつつ、漢字の語彙生産性や構成要素間の関係などを効率よく示せるような配慮を行って課ごとの配当漢字を選択しているようであり、非漢字圏地域の学習者に認知・学習過程に配慮した、意欲的な試みの産物であると評価できる。

5. 自主教材の進んだ課における漢字提出

前章まで、『みんな』の付属漢字教材である『漢字Ⅰ・Ⅱ』と『練習Ⅰ・Ⅱ』の間に有機的な関連性が乏しいため、『みんな』を主教材としているパリ第7大学では、自主作成漢字教材『KM1・2』を作らなければならなかったという事情を説明し、『漢字Ⅰ』『練習Ⅰ』との対比分析で、『KM1』が非漢字圏の学習者のためにその学習過程と認知能力に配慮した姿勢を持つ教材であることを論じた。前章の分析が主教材の第1課～第5課に相当する文法・語彙学習と対応する部分についてのものだったので、本章では、さらに進んだ課について、『KM2』がそれぞれどのような方法で漢字を提出しているのかを、『漢字Ⅱ』『練習Ⅱ』との比較で検討する。まず、全50課ある『みんな』の半ば過ぎの第26課について、次に30課以降について見てみる。

5-1. 第26課について

『みんな』の第26課は「初級Ⅱ本冊」の最初の課である。したがって、『漢字Ⅱ』ではこの課以降は課とユニットが対応する。一方、本論3章で説明したように、第26課から始まる『練習Ⅱ』は、配当漢字を、JLPT3級漢字マスターを目指す「ステップ1」と使用頻度の高い2級漢字の学習もめざした「ステップ2』に分けている。26課の本冊の語彙と漢字教材の配当漢字の重なりを調べてみると、次のようになる。

- ◇ 本冊と『漢字Ⅱ』『練習Ⅱ』『KM2』すべてで一致する漢字：湯
- ◇ 本冊と『漢字Ⅱ』『KM2』で一致する漢字：横
- ◇ 本冊と『練習Ⅱ』『KM2』で一致する漢字：参・探・申
- ◇ 本冊と『漢字Ⅱ』でのみ一致する漢字：遅
- ◇ 本冊と『練習Ⅱ』でのみ一致する漢字：直・接
- ◇ 本冊と『KM2』でのみ一致する漢字：紹・介・弁・宇・宙・搜・込・片・燃・缶・絡・困

一瞥して分かるように、『KM2』の本冊語彙漢字との重なりが際立っている。事実、本冊と重なっていない漢字はなく、つまり『KM2』、それだけで本冊の文型・語彙学習に沿った漢字配当をしていると言える。一方、本冊の新出語彙で『KM2』の第26課までに学習されていない漢字は、固有名詞のものを除けば、「遅」(第29課に配当)「管」(第28課に配当)「怖」(第47課に配当)「瓶・柔」(『KM2』に採用せず)のみで、学生には既習漢字と第26課の配当漢字のみで、本冊の本文や練習問題の語彙のほとんどが読み・書き・意味ともに提示されたことになる。

では、この段階ではまだ本冊か『KM2』に出てきていない『漢字Ⅱ』『練習Ⅱ』の漢字はどのようなものかということ、『練習Ⅱ』の「首」(本冊に採用せず)・『漢字Ⅱ』の「遅」・『練習Ⅱ』の「座」(『KM2』第31課に配当)のみである。これ以外は、本冊か『KM1・2』ですでに提出されている漢字ばかりである。すなわち、『漢字Ⅱ』と『練習Ⅱ』の第26課で『KM2』使用者が既習の漢字を数えてみると、前者では漢字10字のうち8字、後者では「ステップ1・2」合計の24字のうち21字に上る。言い換えれば、パリ第7大学の学生は『KM1・2』で勉強している間に『漢字Ⅰ』『練習Ⅰ』で扱っている漢字以上の数の漢字を学習済みだということである。しかも、『漢字Ⅱ』『練習Ⅱ』の漢字が、ともに本冊第26課の学習文法項目、「～んです」「～んですが、～していただけませんか」を使用する文脈に使われている例が示されていないことがある(特に、『漢字Ⅱ』にその傾向が強い)ことを考えると、『KM2』の本冊の内容にしっかり準拠した漢字の配当には、『KM1』の分析のときに指摘した、漢字を使用する文脈を考えて配当する漢字を選択するという基本姿勢がここまで貫かれていることが分かる。

5-2. 27課以降について

『KM2』が本冊とどの程度重なっているのかを見ていくと、30課までぐらいいは、ほとんどの漢字が重なっている。31課以降になると課によって、重なっている漢字が半分ぐらいになってくる。たとえば、35課では、漢字20のうち、重なっている漢字は、「咲」「葉」「許」「可」「法」「拾」「泉」「原」

の9字である。逆にどんな漢字が足されているのかを見てみると、この課では、季節やスキーの話題が出てくるので関連語彙として「枯れる」「氷」「凍る」という語彙が扱われている。『KM2』では、関連語彙を出し、話題が広がるように考えられていることが分かる。

これが、37課以降になると重なる割合がさらに減り、38課を見ると、「育」

「類」「爆」「似」の4文字しか重なっていない。43課以降では、本冊自体の新出語彙が減っており、『KM2』では、各課の配当漢字は20ずつと変わっていないので重なる率が減るのも当然であるが、提出されている漢字がどのようなまとまりのもとに出されているのかが分からなくなっている。

本冊最後の第50課について前節で行ったのと同じ分析を行ってみると、提出された漢字の重なりぐあいは以下のとおりである。なお、『漢字Ⅱ』は、最後の2課をまとめて扱っているので、そのまま分析にかける。

本冊と『漢字Ⅱ』『KM2』で一致する漢字：郊・放・拝

◇ 本冊と『漢字Ⅱ』でのみ一致する漢字：参

◇ 本冊と『KM2』でのみ一致する漢字：封・協

一見して分かるように、『練習Ⅱ』の漢字は、本冊第49課に登場する「貿」「易」「寄」「勤」を除けば、本冊とも他の2冊の教材とも、重ならない漢字を挙げている。これは、教材の最後のほうに来て、いままで扱っていない漢字を消化しているためである。もはや、例文も、本冊の学習項目(第49課・第50課ともに敬語)とは特に関連を持たせようとしておらず、例文⑤の「課長、出張の予定表ができました」などは「課長、出張の予定表をお持ちしました」などとすれば課の内容にふさわしいが、そういう配慮は働いていないようだ。実は、同じことが『KM2』でも言えて、第26課のときにはあれほど本冊の内容に沿うような漢字提出をしていたのに、この課では本冊の新出語彙にある漢字は、「拝」「謙」「譲」以外はすでに既習であるため、ここまで扱いきれなかった漢字をまとめて配当したという様子である。『練習Ⅱ』と同様敬語の学習と関連のない例文を載せているが、それでも13の例文中5文は敬語を使用している。だが、例文8)の「小切手を封とうに入れ、しっかり封をして書留で送った」も、このような、小説の一部のような例文にせず、「小切手は封とうに入れまして、しっかり封をして書留でお送りしました」のようにして、より本冊の学習文脈に近づける工夫はできるはずである。この観点からすれば、第50課では、「宅」「拝」「参」(第26課では「参加」を意図したが、ここでは「参る」)「伺」「申」などの敬語関連の漢字を提出した『漢字Ⅱ』がもっとも本冊の学習文脈を意識した配当をしている。

このように第25課では本冊の語彙にあわせるように漢字を配当していた『KM2』は、課が進むに連れて他の漢字教材よりも積極的に漢字導入を図っていた結果、第49課までに906字を提出し終わり、本冊・『漢字Ⅱ』・『練習Ⅱ』の同じ課の漢字が(前述のとおり「拝」「謙」「譲」を除き)すべて既習という状態を作り上げていった。しかし、その間に配当する漢字がだんだん本冊の内容に合わなくなってくるのは、考えてみれば当然のことであり、漢字使用の文脈

を考えて配当漢字を選択するという基本姿勢を維持するのにどういう工夫が必要であったか、そしてその姿勢はどこまで一貫できたのであろうか。筆者の見るところでは、44課以降では、提出漢字の関連性がほとんど見られなくなってきているように思われる。

6. まとめ

本論では、パリ第7大学の自主作成教材、『KM1・2』における漢字提出の方法を分析した。『みんな』を主教材にしている同機関では、その付属漢字教材である『漢字I・II』か『練習I・II』を使用できるはずであったが、第2章で述べたように、学習目標とする漢字数がこの2種の教材の提供する漢字数をはるかに超えるため、また既製の二つの教材の性格の違いからどちらも使い勝手がよくないこともあって、自主作成の教材『KM1・2』を使用している。本論4章・5章で検討したように、その漢字の提出方法からは、漢字を使用する文脈を考えて各課に配当する漢字を選択するという基本姿勢が読み取れ、これを、非漢字圏の学習者のために、教科書本冊が示す文法・語彙の学習文脈に沿って無理なく行える漢字学習の支援方法であるとして、一定の評価をした。

しかし、『KM1・2』は、日本語講座の第3学年終了までにJLPT2級の合格を目指して、1,000字の漢字を覚える基礎を与えなければならず、したがって、主教材の文法・語彙の学習に合わせて、既習の語彙が漢字表記できるように工夫して漢字を提出していきつつ、926字の漢字を覚えさせなければならない。

『みんな』の第5課までに導入する漢字は、『漢字I』が61字、『練習I』が48字(「聞・読・食・飲・買」を第6課の漢字と考えれば、43字)なのに対し、『KM1』は66字と、すでに元来の付属漢字教材を抜いている。これが全2冊終了時に926字、すなわち『漢字I・II』より480字、『練習I・II』より396字、それぞれ多い数として、本冊終了までにどのように積み上がっているのか。特に、既習語彙や文法項目に関連する補助語彙が表記でき、それによって学習する漢字の数を引き上げられるように漢字の配当を考えていくのが、前述したような漢字教育に対する基本姿勢を持つパリ第7大学が挑戦すべきタスクなのだが、それは30課ぐらいまでは、かなり成功していると思われる。しかし、さらに、後半の進んだ課になってくると、『みんな』に出てくる新出語彙の漢字との重なりが減ってきており、どのような方針のもとに漢字が提出されているのかが見えにくい。ただ、『みんな』自体が、43課以降は新出語彙が減っているため、この問題の研究のためには、『KM1・2』各課の配当漢字およびその例文と本冊同課の文法項目・新出語彙ではなくともその課に出ている語彙との関連もさらに丁寧に見ていかなければならないだろう。

【参考文献】

加納千恵子(1994)「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』pp.41-50 凡人社

加納千恵子(1997)「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』pp.257-268 凡人社

- 川口さち子 (2009) 「初級文法・語彙教材から見た漢字教材の分析—付属教材としての有効性—」『聖学院大学論叢』第 21 卷 2 号 pp.189-202 聖学院大学
- 川口さち子 (2010a) 『緑聖文化』第 8 号 pp. (3)–(20) 聖学院大学
- 川口さち子 (2010b) 「ヨーロッパにおける漢字の教育と学習—自律学習を支援する工夫—」『聖学院大学論叢』第 22 卷 2 号 pp.121–137 聖学院大学
- 川口義一／加納千恵子／酒井順子編著 (1995) 『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創拓社
- 川村よし子 (2009) 『チュウ太の虎の巻 日本語教育のためのインターネット活用術』くろしお出版
- 徳弘康代編著 (2008) 『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』三省堂
- 西口光一／河野玉姫 (1994) 『Kanji in Context 中・上級者のための漢字と語彙 Reference Book』Japan Times
- 濱川祐紀代 (2006) 「漢英学習辞典を用いた漢字学習の試み—日本語学習者を対象とした漢字指導の実践—」『漢字教育研究』第 7 号 pp.14-41 日本漢字能力研究協会

◇表 1-1 『漢字 I』の場合

	「みんなの日本語初級 I」のどのあたりで勉強するのがよいか	ユニットの学習漢字と学習漢字語は教科書のどの課に出ているか
ユニット 1 – ユニット 5	第 5 課の後で	第 1 課から第 5 課
ユニット 6 – ユニット 10	第 10 課の後で	第 6 課から第 10 課、あるいはそれより前
ユニット 11 – ユニット 12	第 15 課の後で	第 11 課から第 15 課、あるいはそれより前
ユニット 13 – ユニット 15	第 20 課の後で	第 16 課から第 20 課、あるいはそれより前
ユニット 16	第 21 課の後で	第 21 課またはそれより前
ユニット 17	第 22 課の後で	第 22 課またはそれより前
ユニット 18	第 23 課の後で	第 23 課またはそれより前
ユニット 19	第 24 課の後で	第 24 課またはそれより前
ユニット 20	第 25 課の後で	第 25 課またはそれより前

(‘ 『漢字 I』 p. xi より)

◇表 1-2 『漢字Ⅱ』の場合

1. ユニット 21-ユニット 22 『初級Ⅰ 漢字』で学習した漢字と漢字語の復習。
2. ユニット 23 『みんなの日本語初級Ⅰ』本冊ですでに習った漢字を別の語彙でもう一度学習。
3. ユニット 24-ユニット 25 『みんなの日本語初級Ⅰ』で学習した語彙の中で 20 字の 3 級漢字を学習。ユニット 25 の末尾には、残り 3 級漢字のうちユニット 26 以降で学習する漢字 44 字の一覧表を付けている。
4. メイン・ユニット：ユニット 26-ユニット 50 『みんなの日本語初級Ⅱ』本冊の第 26 課から第 50 課に対応するユニット。ユニット 26 は第 26 課、ユニット 27 は第 27 課、…ユニット 50 は第 50 課、というふうに、本冊の課と 1 対 1 対応。各ユニットの学習漢字と学習語彙は、対応する課の新出語彙から主として選び、その他にそれ以前の課で学習した既習語彙からも選んでいる。教科書のそれぞれの課の学習を終えた後で、各ユニットを教材として漢字と漢字語を学習。（『漢字Ⅱ』p. (9)より要約）

表 2 漢字練習帳の場合

<p>ステップ 1 …●3・4 級及び 1 部の 2 級の新出漢字 各課 9 字</p> <ul style="list-style-type: none"> ●これを習得することにより、漢字練習帳Ⅰの 218 字と合わせると 335 字になり、3 級レベルの漢字力を十分に身につけることができる。 ●非漢字圏の学習者や短期学習者も場面状況のわかりやすい文の中で漢字が習得できる。 <p>ステップ 2 …●2 級漢字 各課 15 字。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ステップ 1、ステップ 2 を勉強し、使用頻度の高い 2 級漢字を習得することで、さらに高水準の漢字力を身につけることができる。また、中級への足がかりとなる。

表 3 各教科書漢字対照表

	みんなの日本語漢字語彙※ () 付きの漢字は、一度出ているが、パリ大学の教科書でその課で扱っている漢字	付属教材 1 漢字 I (220 字) II (246 字)	付属教材 2 漢字練習帳 I (218 文字) II (312 文字)	パリ第 7 大学 1 (500 字) 2 (500 字)
0	教室指示のことば：始 終 休 一度 名前 試験 宿題 質問 会話表現：願 数字：一～十		数：一～十	
1	学生 会社員 医者 方 大 学何歳 初 来 人 銀行員 先生 社員 研究者 病院 失礼 日本 中国 教師 電 気 山田 佐藤	ユニット 1：日月火 水木金土 ユニット 2：一～十 百千万円 ユニット 3：学 生 先 会 社 員 医 者 本 中 国 人 ユニット 4：	人 名 方 本 日 何 大 学 会 社 先 生 行 来 自 車	日 本 一～十
2	辞書 本 傘 手帳 名刺 雑誌 自動車 気持 世話 時計 英語 違 鉛筆 韓国			私 人 何 車 中 国 円 大 学 生 先 語

	語 机	今 朝 屋 晚 時		
3	食堂 電話 新大阪 手洗 事務所 国靴 円 売 場 地下 階 見 受付 会議室 教室 階段 部屋 富士	分 半 午 前 後 休 每 何 ユニット5: 行 来 校 週 去 自 駅 電 車	百 先 万 円 每 時 分 半 国 月 火 水 木 金 土 書	山 川 田 電 話 氣 下 室 会 社 員 百
4	今 時 分 働 朝 起 勉 強 午前 曜日 月火水木金 土 每晚 寝 番号 案内 石田 美術館 問 合 屋 休 東京 午後 郵便局 図 書館 毎日 今晚 終 大変 半			月 火 水 木 金 土 今 時 分 午 前 後
5	京都 帰 家族 奈良 新幹 線 行 誕生日 甲子園 線 電車 次 普通 先月 先週 来週 友達 城 彼女 広島 一人 来年 来月 去年 名古屋 博多 飛行機 神戸 伏見 急行 特急		友 年 今 週 休 前 午 後 校 校 見 閨 読 食 飲 買	行 年 来 帰 曜 東 京 女 駅 友 京 家 去 每 男 週 千 步 校
6	飲 駅 新聞 買 吸 食 卵 日本語 映画 花見 公 園 会 茶 聞 酒 読 紅 茶 魚 写真撮 庭 食堂 牛乳 宿題 手紙 書 店 夜 北海道	ユニット6: 高 安 大 小 新 古 青 白 赤 黒 ユニット7: 上 下 父 母 子 手 好 主 肉 魚 食 飲 物 ユニット8: 近 間 右 左 外 男 女 犬 ユニット9: 書 聞 読 見 話 買 起 帰 友 達 ユニット10: 茶 酒 写 真 紙 映 画 店 英 語		花 店 休 朝 屋 晚 夜 半 食 飲 買 閨 新 読 書 万 都
7	木村 切符 一郎 上 友子 旅行 土産 借 荷物 送 紙 切 貸 教 太郎 君 母 父 習 消		母 父 物 朝 屋 夜 晚 町 山 白 赤 青 黒 安 高 小	上 英 切 手 紙 子 母 父 教 習 達 勉 強 旅 堂 室 礼 計
8	富士山 桜 高 琵琶湖 水 寒 便利 侍 古 青 生活 慣 樂 仕事 忙 一杯 町 親切 元気 自転車 新 暇 易 静 安 車 寮 物 赤 冷 有名 黒 白 松本 難 金閣寺 所 長崎 暑 小			活 樂 暑 寒 青 黒 白 赤 高 安 低 古 元 小 自 町 仕 事
9	料理 好 少 子 早 絵 上手 田中 全然 細 金 時間 用事 残念 木村 小 沢征爾 約束 今度 野球 歌 奥 漢字 下手 主人 夫 嫌 歌舞伎 店 熱 時 々 音楽		男 女 上 下 左 右 中 門 間 近 魚 手 犬 早 計 外	早 好 少 細 用 残 念 間 度 料 理 魚 物 漢 字 約 忙
10	千葉県 男 近 猫 箱 中 前 下 段目 右 喫茶店 本屋 木 冷蔵庫 物 部屋 (銀行) 窓 左 犬 隣 棚 電池 乗り場 花屋 間 公園 園 (写真) (机) (奥) (家 族)			場 所 机 写 族 目 色 真 部 右 左 屋 売 近 々 犬 銀
11	年 枚 全部 外国人 両親 姉 兄 週間 回 天 気 出 速達 船便 航空便 台 封筒 弟 妻 兄弟 妹	ユニット11: 送 切 貸 借 旅 教 習 勉 強 花 ユニット12: 歩	兄 弟 姉 妹 家 族 春 夏 秋 冬 気 天 多 少 元 步	外 出 議 全 両 親 兄 姉 弟 妹 回 妹 台 動 働 天 速

	書留 (自転車)	待立止雨 入出売使作		主 転
12	雨九州 (北海道)夏多 空港海祭祇園祭疲 涼冬暖試験簡単曇 辛軽甘春秋季節 初生け花果物野菜紅 葉遠			遠雨雪北海 道春夏秋冬 涼輕空有 名肉初
13	欲沖繩週末船 經濟別々注文定食 牛どん少々待広すき 焼き散歩食事川釣 市役所登録遊泳迎 結婚寂狭		入出広止 始開海川 世界画映 花茶語英	欲変末船 牛注文待泳 広冷入園 遊猫公 奧散
14	住所開話梅田信号 曲止塩取砂糖手伝 閉呼地図(荷物)持 降始急			方番号伝 住持呼開閉 運止願寝降 始地図荷
15	使知住独身結婚 特思高校学校製品 日本橋作服研究資料 時刻表床屋齒医者 病院世界		体足口頭 耳目立知 住思使作 品長明肉	知使酒消 吸窓借結 婚製品服 齒医者病 立院
16	浴終乗背髮留引 押暗証金額万確認 頭寺重暗長目緑 明神社乗り換える神戸 (映画)	ユニット13:明 暗広多少 長短悪重 輕早 ユニット14:便 利元氣親 有名地鉄 仕事 ユニット15:東 西南北京 夜料理口 日足曜		浴終館乗 引押背映 頭寺狭画 長明暗神 戸足
17	痛熱口出張薬大事 資料禁煙危大丈夫心 配覚返問題脱病氣 悪払残業置答外 入上着下着保険証忘 大切肉所座		問答心配 子売場字 漢料理主 着新古持	靴張薬置 市役登録 問題作心 悪起嫌配 着返
18	趣味日記見学現金集 動物馬牧場洗運轉 予約祈国際部長課長 捨弾歌			記払馬撮 洗飛機予 捨受付枚 辞絵趣 資歌味
19	相撲体調子乾杯実 水無理眠泊掃除 洗濯弱登葛飾北斎 静岡県山梨県		電話音楽 歌度教習 貸借送強 旅室登勉	茶体調良 松実無音 島練甘弱 暖温富士 静泊
20	物価僕小林君 着物要修理直 高橋			直辛林君 彼疲難箱 曇橋産貸 暇独身痛 若形
21	思首相言意見(祭) 試合勝最近強 交通大統領同若長短 政治役立	ユニット16:降 思寝終言 知同漢字 方	不事言意 同仕病院 医者堂屋 用有店民	思言意祭 試合勝負 最便利野 球同利短務 首相

22	万里 長城 家賃 和室 押 し入れ 布団 眼鏡 帽子	ユニット17: 図 館 銀 町住 度 服 着音 樂 持		忘 里 城 村 庭 不 和 洋 菜 帽 喫 雜 誌 歲 業 眼 鏡 要 業 鏡
23	音 (回す) 正月 時々 道 故障 動 触 駐車場 機械 角 交差 点 聖徳太子 造 法隆寺 建物	ユニット18: 春 夏 秋 冬 道 堂 建 病 院 体 運 乗	正 銀 図 館 道 動 建 特 終 駅 写 真 牛 員 林 森	釣 蔵 庫 建 証 郵 局 現 保 險 妻 寂 符 世 界 政 治 駐
24	自分 太郎 菓子弁当 意味 引っ越し 連れる 説明 準備	ユニット19: 家 内 族 兄 弟 奥 姉 妹 海 計		送 太 郎 菓 課 傘 案 内 焼 連 説 塩 皆 連 説 僕 越 第 階 僕 越
25	億 考 世話 転勤 皆 頑張る 着く 練習 変 田 舎 考 牧野	ユニット20: 部 屋 室 窓 開 閉 歌 意 味 ユニット20~22: 初級Iの復習 ユニット23: 既習 漢字を別の語彙で学 習 ユニット24: 試 験 問 題 答 用 台 始 集 研 究 ユニット24: 飯 場 正 世 界 急 特 洋 不	田 考 親 切 試 験 部 文 歳 留 議 散 浴 降 欲 億	億 考 勤 杯 頑 舎 簡 单 留 覚 取 眠 熱 迎 故 障 阪 例
26	渡辺 大阪弁 運動会 参加 直接 管理 片 燃 横 瓶 缶 湯 連絡 困 福岡 都合 気分 捜 間に 合う 紹介 探 申し込む 柔道 電子 土井隆雄 宇宙 怖 飛行士	(以下各ユニットは 各課に対応のため 「ユニット」省略 絵 議 辞 駐 帽 湯 横 遠 欲 遅	ステップ1: 悪 急 去 紙 首 県 都 速 直 2: 接 湯 探 参 寺 勝 負 願 座 眠 狭 甘 辛 卵 申	紹 介 弁 参 加 宇 宙 搜 国 表 探 申 込 片 燃 横 缶 湯 絡 困
27	飼 鳥 昔 声 関西 通信 販売 大工 夢 波 走 (修 理) 秋葉原 景色 (美術 館) 花火 自動 台所 道具 伊豆 屋間 漫画 形 不思 議 例 付 自由 将来	景 色 声 所 具 鳥 昔 夢 回 泳 座 送 役	ステップ1: 空 業 鳥 通 味 運 転 力 色 2: 取 荷 簡 忙 单 覚 販 給 慣 涼 将 給 夢 疲 痛 彼	飼 鳥 昔 港 通 信 販 波 訓 壁 秘 密 答 修 景 美 術 工 棚 夢
28	偉 熱心 経験 習慣 (違) 選 息子 娘 力 鈴木 給料 番組 値段 優 (管理人) 歌手 人気 (声	形 品 慣 説 将 力 熱 心 眠 優 選 通 経		鉄 偉 経 験 慣 違 選 研 究 娘 力 値 段 給 婦 線

) 小説家 体育館 無料			組 管 声 息
29	掛 (遅) 外側 辺 網棚 確 四ツ谷 財布 落 汚 袋 破 壊 地震 三 宮 壁 指 割 西	喫 辺 神 妻 亡 側 落 消 汚 割 全	ステップ1: 地 走集 研究 曜 重 池 形 2: 横 橋 決 相 談 橋 忘 置 授 苦 勞 希 望 復 植 机	遅 割 害 袋 衣 破 宿 敗 過 正 並 折 汚 昨 並 落 各 側 辺 確 確 谷
30	交番 相談 元 辰 予定表 苦勞 希望 皿 人 形 飾 並 玄閣 廊下 授 業 予習 集 復 講義 隅 丸 地球	皿 隅 机 引 箱 予 定 冷 置 掛 片 復 約		交 決 談 辰 鳴 卷 耳 集 届 池 周 植 授 復 次 定 苦 勞 希 望
31	(将来) 温泉 続 (別) 意 向 支店 休憩 教会 連休 展覧会 卒業 踊 都会 美 自然	空 港 文 務 園 飛 機 普 式 授 卒 業 連 残	ステップ1: 東 西 南 北 雨 風 夕 服 予 2: 晴 星 熱 約 束 辞 練 返 最 続 客 角 治 格 卒	将 続 系 席 欠 支 発 必 順 怒 座 観 展 覧 別 式 普 客 卒 別 普 章
32	足 成功 胃 診 星 (直 接) (西) 合格 負 占 牡牛 宝 当 東 恋人	風 星 雪 夕 牛 乳 最 勝 負 続 直 治 登 辰		济 紀 想 型 列 進 科 口 戦 争 接 夕 晴 雲 風 吹 西 南 診 特
33	立入禁止 (禁煙) 以内 警 察 罰金 規則 投 非常 使用 休業 本日 禁止 営 業 出席 外す中村 電報 打 代 祝 亡 悲 葬式	付 角 交 席 荷 以 触 級 伝 投 曲	ステップ1: 以 質 薬 注 閉 番 号 交 危 2: 具 席 弘 無 失 礼 黄 非 常 逃 規 守 歯 並 則	急 禁 煙 逃 守 規 則 叫 税 灣 比 投 非 常 營 当 反 以 警 察
34	磨 砂糖 盆踊り 紺 茶道 載 折 家具 組み立てる 質問 (講義) 個 調味 材 料 煮	塩 番 号 甘 辛 細 踊 磨 換 質		砂 財 布 黄 触 鼻 顔 向 笑 供 共 具 印 質 解 角 講 構 義 流
35	咲 向 島 箱根 日光 草 津 志賀高原 夜行 詳 操 作 葉 機会 許可 正 屋 上 方法 味 (拾) 白馬 設備 珍 仲 必要	島 村 葉 緑 活 向 珍 変 捨 拾	ステップ1: 工 村 暑 寒 便利 所 泳 活 丸 2: 向 困 違 機 曲 皆 務 法 島 信 禁 遅 許 可 禁	咲 枯 価 氷 凍 増 械 器 数 他 点 陽 虫 葉 許 可 法 拾 泉 原
36	布団 工場 曲 (弾) 絶対健康 客 様 特別貯金 太 硬 守 過 携 帶 剣道 (打) 歴史 紀 汽車 汽 船 大勢	工 記 耳 齒 野 菜 低 太 弱 若 別 打 過 違 必		団 曲 彈 打 果 位 捕 草 骨 胸 腹 腰 腕 健 康 絶 対 断 検 査
37	踏 注意 発見 原料 米 麦 (造) 発明 埋め立てる 関西 技術 土地 騒音 利用 建築家 設計 褒 招待 警官 泥棒 東照宮 江戸 輸出 翻訳 石油 輸入 科学者 誘 豪華 彫 刻 左甚五郎 匹	米 寺 船 機 呼 頼 注 招 輸	ステップ1: 発 光 飯 台 題 待 米 宿 成 2: 港 拾 捨 捨 輸 招 呼 原 頼 技 術 料 退 性 岸 変	米 造 輸 走 競 技 恥 招 歴 史 代 官 統 領 石 油 築 関 設 氏
38	育 回覧 整理 (冊) 海岸 (卵) 橋 源氏物語 書類 電源 原爆 池田 双子 似 性格 優	枝 岸 卵 橋 冊 製 無 難 易 散 育 亡		育 退 筆 成 績 評 迷 惑 床 卵 州 亡 類 爆 暴 冊 判 似 期 限

39	倒見合複雑事故 邪魔死安心恥 (大勢)早退台風汗離 婚号伺洋服化成人	震狭代恥並 困死配倒並 勢途	ステップ1:代 死合結婚必 式全次婚絶 2:要故残対 然難残汚 念複雜達確 表倒込	倒複死夫 助殺底重 等級卒被 王演勢操 汗途差悲
40	到着酔測危険 返事成績様子数傷 届量事件爆弾積一 生懸命犯人	都合表返 次個危険 要決込発 調初		到測危個 固識肩的 胃液裏臟 血量件積 犯面深疑
41	(皿)猿預申し訳 助指輪祖母発音 見舞孫取り替え 興味情報(掃除)運 浦島姫暮陸煙	祝菓舞産 果靴宿祖 袋法取替	ステップ1:説 進園公内 産園公内 案化石平 2:油和係 戦争関経 的紹介濟 律薄厚	皿暮寄老 掃除指輪 祖示玉額 替興預陸情報 貯緑倍央 森貧豊環 層省護境 律際係平 包算費化
42	(貯金)論弁護士法律 関係平和国連戦争混 沸包計算厚薄目的 文化缶詰缶切り栓抜 調査	石濟政化 律際厚薄 包沸		貯森層律包 貯森層律包
43	(桜)適当年齡收入 (優)増暖房幸	符枚暑寒 暖涼咲弘 増迎	ステップ1:回 起頭短低 輕洗洋別 2:幸笑泣減 静由増適 倍暖適当 政美連絡	桜博隣減珍 然追伸延 幸匹種房 齡福適優 收逆感
44	泣笑涙安全薄濃 滑乾理由丁寧倍頼 順序縁起	頭顔髮倍由 押痛靜 泣笑		泣淚混髮 毛詳粉采 養軍材麥 厚商由容濃 農由容師
45	(場合)謝保証書領収 途中優勝贈(回答) 券売機惱	贈点皆速 念覚働練絡	ステップ1:市 区引太好 働押細冷 2:寝受付 飛船段階 値役初優 因論途宅	謝券救防 署準備困 翌贈飯札 努域貴心 象像緊緊惱
46	原因注射具合 (食欲)宅配留守渡 知識宝庫入力	菓億彼洗 濯乾燒渡		因居射論 詩姓季節 岩畑含離 宅路渡御 様程芸芸詞
47	救急車札幌実験 失敗賛成(怖)祇園 (星)晴平均寿命比博 士脳化粧品	祭科庭報 性歳怖吹	ステップ1:声 暗弱遠野 反伝若両 2:遊選球 育温燃吹 落届賛恋 庭妻夫祖	震格羽幅 秒距丸告 性星贊異 祝舞怖態 均命均能
48	敵塾入管再入国 競走芸姿	徒息娘留 君忙届遊久		頂竹光喜 頼仏宝皮 貝滿皇兵 隊乳徒再 久仲責任
49	灰存召遠慮尊敬寄 貿易勤講師大江愛媛 県賞光障害	灰質存階 様召寄疲 勤泊	ステップ1:京 私乗菜定 記雪絵消 2:奥渡助 酒吸例調	灰存慮敬 召致在職 就得乾才 未状停換 買易賞賞賞

50	参 拜見 緊張 放送 象 協力 心 感謝 謙讓 (封筒) 郊外 拜啓森 迷惑	宅 段 兩 私 郊 放 拜 参 伺 申	支 過 勤 貿易 寄 樣 感	拜 伺 愛 翻 誰 己 專 門 欧 移 封 郊 司 放 訪 協 府 区 丁 基
----	-------------------------------------------------	---------------------------	-------------------	-----------------------------------------------------